

ヴェトナムの旅から

横松和平太

春まだ浅い3月下旬から4月初旬にかけて、生まれて初めてヴェトナムを旅してきた。ヴェトナムは予てより訪れてみたい国だった。料理が美味しいと聞いていた。我々団塊の世代にとってはヴェトナム戦争の地として忘れられない国だ。と言っても、能天気なノンポリ学生で山歩きに明け暮れていた私にとっては、遠い異国の出来事でしかなかったが。それが今回は図らずも先輩のワングルOBの企画に潜り込むチャンスができたのだった。

少数民族大好きな先輩やヴェトナム在住のOBの企画力、更には屈強な先輩達のパワーのお陰で、ちょっとユニークなワングルらしい旅ができた。ハロン湾とかビーチリゾートといった海のヴェトナムには目もくれず、山のヴェトナムを旅したそここのシーンを振り返りながら、インスパイアされたものを書きとどめてみたい。映画や小説に描かれたヴェトナムを追体験することで、旅をより味わい深いものにしてみたいのだ。

緑に染る街ハノイ

旅の始まりはハノイからだった。まず、私の感覚の中で反応したのは耳から入ってきたヴェトナム語だ。無論初めて聴く言葉なのだが、どこかで聴いたことがあるような感じがした。香港や広東に行ったことがあるのだが、中国南部の言葉のような響きだと思った。そして街路樹など緑が美しい街だという印象だった。

ヴェトナム映画を見てみれば、もう一度確かめられるだろうと思い、ハノイを舞台にした映画のビデオを探してみた。『夏至』(2000年)が見つかった。ヴェトナム映画といってもハノイ出身で少年時代にパリに移住したヴェトナム人のラン・アン・ユン監督の作品である。ハノイを舞台に三姉妹をめぐる人間模様が描かれている。もう一つ描かれていたのが、緑と青を基調にした美しい映像だった。ハノイの街や郊外に溢れる瑞々しい緑の美しさが鋭く切り取られていた。現実のハノイの街に溢れ返っていたバイクや人混みや色彩の氾濫は出てこないのだ。ヴェトナム映画というよりフランス映画だ。俳優達が喋るヴェトナム語を聴いてみたが、やはり最初の感覚と同じであった。室内の仏壇には漢字で「心」の文字、どこかに中国が入っているのだ。中国は言葉だけでなく、文字も残っていた。街中に見られる文字はほとんどはヴェトナム式ローマ字と云われるものばかりだ。漢字は僅かに寺院、祠堂に残っているだけだ。「文廟」という孔子を祀った昔の大学のような旧蹟も訪ねたが、中国から取り込んだ科挙制度の痕跡が試験合格者達を印した夥しい石碑群に残っていた。食べ物だって、春巻きやフォーなどの麺類、或いは豆腐料理など中華料理がベース、それにご飯に箸だ。アオザイという民族衣装もよくみればチャイナドレスの変形だ。やはり中国の影が残っているのだ。ヴェトナム語の語彙の60%は漢字由来によるという。人名・地名や生活用語には漢字に置き換えれば親しみやすいものが多い。例えば、

ヴェトナムは越南、ハノイは河内、ホーチミンは胡志明、ゴーは呉、グエンは阮、通貨のドンは銅、アイクォックは愛国、と云うように。

漢字文化圏

かつて東アジアの国々は中国を覇者とした中華文明圏の中にあつた。漢字で孔子・孟子といった儒教のテキストを勉強し、漢文が共通の教養であつた時代が長く続いた。日本も朝鮮半島もヴェトナムもそうであつた。日本が近代化にいち早く成功した要因の一つに国語があるという。近代化にあたって、漢字文化の扱い方は国によって異なっている。

今もって漢字が健在なのは、中国、台湾・香港、日本。漢字をほとんど捨てた国が、韓国・北朝鮮、そしてヴェトナムだ。捨てたといつても漢字に由来する言葉が多いのはヴェトナムだけでなく、韓国・北朝鮮でも同じであり、表記を独自の文字としているだけのことだが。どちらも中国の文字だから離れたい、嫌いという意識があるのかも。

ヴェトナムは中国から離れたくて、13世紀には民族文字としてチュノム(字喃)を考案したが、結果的には定着しなかつた。現在のクォック・グー(国語)という文字の起源もフランス人宣教師が18世紀に考案したものらしい。日本は近代化にあたって、江戸時代までの漢字文化に代わり西欧文化をモデルとした。だがその際に文字・言語として漢字を捨てることはしなかつた。日本語を西欧語と比べて不完全で非能率なもの、遅れたものとする意見があつた。英語を国語とせよ、とかフランス語にせよ、とか漢字全廃を前提としてのローマ字表記の導入などの考えもあつた。しかし、日本人は日本語を使い続けて教育を普及させ、技術を進歩させ、経済を発展させ、社会を繁栄させてきた。その背景には、遠い昔の漢字導入以来の日本人ならではの創意工夫、日本化を上手くやってきた歴史がある。本来は外来語である漢字・漢語を異民族の文化とは思っていない位だ。仮名文字の発明、呉音・漢音など複数ある音読みと訓読みの二重読み。本来の言葉であり日常的で具体的な「やまと言葉」で、難しいが抽象的な表現に適した漢語を同時に理解できるという二重構造がポイントだという。例えば、水道という字を見て、「スイドウ」は「みず」の「みち」と理解できることは、庶民が言葉を理解しやすくすることに繋がっている。これが英語やローマ字のような表音文字ではこうはならない。明治維新で身分・階級を越えた「国語」を設け、教育制度を充実させ、いち早く質の高い中流実務階級と庶民階級を作り上げ、そして西欧にキャッチアップできた一つの理由である。

日本は漢字から離れずに近代化に成功し、朝鮮・ベトナムは離れることで遅れをとったかに思える。中国との距離感にどうも一因があるのか？中国に本当の陸続きであつた朝鮮半島とヴェトナムはかなり永きに涉って属国状態におかれた。ヴェトナムの歴史を紐解いてみれば、紀元前111年に南越国が漢に滅ぼされて以来、約1000年間被支配された。その後も程度の違いこそあるが、度々侵略された過去がある。近くは1979年に起きた中越戦争だろう。中国から云わせれば、恩知らずの子分に対する懲罰だろうが、ヴェトナムからみれば虐めであり、侵略だろう。文明上の師匠への尊敬と、虐められた、押さえつけられ

たという被害者意識、劣等感の併存という複雑な感情が深く染み込んでいるようだ。それにしても1000年以上という時間の蓄積は半端なものではないのだ。ハノイ滞在中の現地ガイドをしてくれたのは、日本語の話せる女性であった。彼女に聞いてみた。「嫌いな国はどこですか？」言下にこう答えが帰ってきた。「99%の人は中国が嫌いです」。日本でも中国が嫌いな人が最近多いようだ。でもここまでのことはない。

北朝鮮のキム・ジョンウンも中国が嫌いなはずだというコラムを読んだ記憶がある。近所付き合いは実に難しい。朝鮮半島やヴェトナムは自らの力による近代化の前に、西欧列強の植民地化により不幸な遠回りを余儀なくされた。

日本は幸いというべきか、陸続きではない。大陸からも西欧からも辺境の地であることが幸いている。そして、いいとこだけを取り込んで自分のものにしていくという特技があったからこそ、東アジアの中では例外的に束の間の成功を手に入れることができた。

だが、反面離れた島国だからなのか隣人達の気持ちや文化に鈍感なところがあるのが弱点でもある。夜郎自大となって幾たびも失敗してきた歴史がある。

北部山岳地帯を歩く

ハノイから夜行寝台列車に乗り、次に向かったのは中越国境の街ラオカイだった。河を挟んだ対岸の中国側の街には漢字が氾濫していた。中越戦争時には中国軍に一時占領された歴史もある。早朝の駅前で見地ガイドの若者の出迎えを受け、我々が訪れたのは北部山岳地帯の村々だ。道路が標高を上げて行くにつれ、植生が変わってゆくのが見てとれた。バクハー(北河)という街につき日曜市場をまずは見物することに。近隣の少数民族が集まる空間だった。華やかな色彩と、売られものとして様々な動植物も集まる場所であった。モン族、ザオ族、ターイ族、タイ族等々ヴェトナムの少数民族については、出かける前に、少数民族フリークの先輩のレポートとか、ガイドブックで少しだけだが予習し、ハノイでは国立民族博物館も見学していた。市場では、華麗な衣装の花モン族が特に目立っていた。山岳地帯では、少数民族こそが多数民族であり、国全体の多数民族であるヴェト(越)族は少数民族でしかない。ヴェト(越)族はキン(京)族と称しているが、主に平地に暮らす農民だ。北部では長い中国との関係からみて混血もある程度あったのではなかろうか？劣等感の裏返しとして、都びとを気取って京(キン)族と自称しているのだろう。ここにも中国の影があるようだ。少数民族達のルーツは中国の雲南省とか広西省といった中国奥地らしい。そこからヴェトナム、ラオス、ミャンマーにかけての山岳地帯に広く暮らしている。彼らに本来国境はないはずだ。いわゆる照葉樹林文化の人達であり、焼畑農耕、味噌・納豆、養蚕、漆器、茶葉、蕎麦、等々日本の縄文時代文化のルーツと重なっているとか。

日曜市場の見学だけでなく、近郊の花モン族の村の中を歩いたり、タイ族の村にホームステイもした。晩には、村のおばさん達による踊りのイベントもあり、一緒に輪になって踊るといふ大盛り上がりの一夜も体験できた。若いガイド・カイさんの奮闘のお陰だ。

フランス人が、植民地時代に拓いた高原リゾートの街サパでは、郊外の黒モン族の村にも訪れた。棚田の美しい谷に開けた村で、欧米人のトレッカーが目立った。ガイドをしてくれたのは、旅行客から独学で覚えたという流暢な発音の英語を操る、可愛らしいモン族の娘さんだった。

モン族という言葉が私が知ったのは映画の中だった。「グラン・トリノ」(2009年公開)である。クリント・イーストウッドが主演である。愛車グラン・トリノに一徹な思いを抱くデトロイトの元自動車工の隠居男と、隣のモン族家族との触れ合いを描いた秀作だ。モン族というのはどんな人で、何故アメリカに暮らしているのか、その当時は全く知らなかった。ヴェトナム戦争当時に主にラオスの山岳地帯に住むモン族が米軍に協力し、北ヴェトナム軍側にいたモン族と戦った歴史があるという。戦争終結に伴い居ずらくなった多数のモン族を難民としてアメリカは受け入れたという。映画の中のモン族にヴェトナムの山岳地帯で出会えた気がしたのだった。

私たちの今回の旅の大きな目的として、ヴェトナム最高峰へのトレッキングがあった。その名はファンシーパン山。標高3143m、インドシナ半島の最高峰でもあり、高原の街サパの西に聳え、晴れていれば国境を越えて遠く中国やラオスを見下ろせる山だ。登山口は1957mのチャムトンゲート。地元の人や欧米人のトレッカーは一泊二日の行程が多いようだったが、前期高齢者集団としては二泊三日とした。途中キャンプサイトが二カ所あり、テントや小屋で泊まった。小屋といっても掘っ立て小屋みたいなものだが、ちゃんとビールも売っていたようだ。標高差およそ1200mだが、尾根道は容赦なく直登しており結構キツイ、この登山道はフランス人が拓いたのか。楽しみつつ登るといふより、印象としては、一直線にひたすら頂上を目指す道だった。頂上からは余すところない大展望を期待していたのだが、生憎の強風とガスであった。皮肉にも登頂の前後は快晴だったのはどういうことか？誰のせいなのか？。サポートしてくれたポーターは黒モン族の若者達、一人は女性だった。女性だからといって、荷物も仕事の分担も特別な扱いがあるようには思えなかった。登山口に再び下山してからは、日本メーカーの中古建設機械が道路工事に活躍中の赤茶けた山岳道路を下り、鄙びた田舎町シンホで一泊。翌日にはディエンビエンフーに到着できた。途中、黒ザオ族、赤モン族、黒ターイ族の村々を訪ねながらのドライブであった。少数民族は標高に応じて棲み分けをしているようであり、住まいのカタチも低くなるに従って高床式が目立つようになっていった。

ディエンビエンフーの戦い

この単語を学生時代に習った記憶はあるのだが、今まで無論深く理解していなかった。街で一泊し、ガイド氏の案内で戦争に関する遺跡を目の当たりにできた。戦争博物館とかフランス軍の司令部跡、最後に攻略されたA1の丘(フランス軍はこの陣地にイザベルという女性の名前をつけていた、いかにもフランスらしく)、勝利の記念像の丘公園等だ。

ディエンビエンフーは漢字では奠邊府と書く。奠は定める、邊は辺境、府は役所という意味、ラオスとの国境が近い辺境を守る為の砦があった湿地帯の多い広大な盆地だった。

1953年に当時ヴェトナムを再植民地化しようとしていたフランス軍と、ヴェトナムの独立を目指していたヴェトミン軍が戦った歴史的な場所であった。ヴェトミン軍は中国やソ連の支援を受けて、泥臭い人海戦術と塹壕作戦で次々とフランス軍の陣地を陥落させた。

後に、フランスのあとを受けてヴェトナムに介入したアメリカは、ヴェトナム戦争で苦杯を舐めたが、原型は既にこの時に見られた。フランスは女性名の陣地は守ろうとしたが、自由の為に戦うなんてことはせずに早々と諦めたのだった。それにしても、この時フランス軍を率いたカストリ大佐は遺跡のあちこちで降伏写真を掲げられ惨めであった。ヴェトミン軍を率いたボー・グエン・ザップ將軍は100歳を過ぎて未だ存命だとか。ヴェトナムはしぶといのである。

この戦いを描いた小説がある。『前進か死か インドシナ編』(1994年)である。作者は柘植久慶(1942~)。小説の設定では、主人公は旧仏印に出征した日本帝国軍人。敗戦後もヴェトナムにとどまっていたが、フランス人の妻をヴェトミンに殺されフランス軍の外人部隊に志願。血と硝煙と泥濘のディエンビエンフーの戦いに参加、奮闘するという話だ。読んでみたが、ドラマチックな展開と迫力のある描写とに惹きつけられるところもあったが劇画的であった。主人公の設定が、ヴェトミン軍ではなくフランス軍に参加した、というところがユニークだ。当時のヴェトミン軍には、アジア解放の大義を信じて参加した旧日本軍の軍人が少なからずいたという。又、接收された大日本帝国陸軍の山砲等の武器も活用されたと云う。この逆のケースが果たしてあったらどうか？

この作者は、フランス外人部隊の格闘技教官としてアルジェリア戦争に参加したとか、ラオス軍に参加してゲリラ戦を指揮した経験があると自称している。はたまたアメリカ軍のグリーンベレーの訓練を受け、インドシナ、ラオス等で極秘作戦に参加したとも称している。しかしほとんど信用されておらず経歴詐称だとされている。サバイバル評論家とか軍事評論家としてマスコミに出ていたこともあるが、今は聞かない。どうやら、アタマの中の出来事を、実際あったかの如く書くことはできても、本当のように思わせる才能にはかけている持主のようだ。柘植氏は作品中の地図でディエンビエンフーを莫邊府と表記している。莫という字には、辞典によれば、“虚しい、果てしなく広い、無し、なかれ、”という意味がある。これだと、確かにかの地の持つイメージにふさわしいような気もしないではない。だが、この字の読み方は、漢音ではボ、バク、呉音ではマクとある。ディエンとは遠いように思えるがどうだろうか？。やはり本物の作家ではないようだ。ディエンビエンフーを後にしてハノイに再び戻り、次なる目的地ダラットへと私達は向かった。

ダラットと『浮雲』

ヴェトナムで最も色濃く浸透しているのは、中国なのだがフランスの影も又感じた。フランスがインドシナの地に手を伸ばし始めたのは、1801年にグエン(阮)朝が南北統一を果たした時あたりからである。フランスからの志願兵と宣教師の力を頼ったことから、進出が始まって行く。1862年には条約を結ばされ、結局1882年には保護下に置かれ、実質的に植民地化されてしまう。幕末・明治の日本も危なかった。第二次世界大戦中には、仏

印に進駐した日本軍との二重支配を経て、1945年に日本の敗北と共にグエン(阮)朝が崩壊。ラストエンペラーのバオダイがフランスに亡命するまで、フランスの統治下に約80年以上おかれたことになる。

フランスはこの国に避暑地を開拓し残していった。北のサパに対し、南にダラットだ。何れも標高約1500m位という高原。街の中心に湖があり、周囲にコロニアル風な建築のホテル、教会が並びたつ風景。1922年からどちらも保養地として開発された。サパはハノイから遠すぎて一時さびれたらしいが、ダラットは地の利を得てか、ずっとリゾート地として賑わってきた。フランスの総督だけでなく、バオダイ帝などの要人が別荘を構え、今に建物が残る。日本軍も敗戦の年の3月、南方軍総司令部をサイゴンからここに移した。

かつては貴族や高級官僚達が避暑や狩猟を楽しんだところらしいが、今はヴェトナムの新婚さんのハネムーンの地としても人気のリゾート地だとか。高原の街だから、早朝には朝霧が美しく爽やかにたなびく。この気候を利用して、周辺では花、野菜、茶葉、コーヒーなどの栽培が盛んであり、ダラットワインも有名だ。

この美しい高原の街を舞台とした小説を書いた作家がいる。林芙美子(1903～1951)がその人だ。戦前には放浪記がベストセラーになった作家だ。戦後の代表作が『浮雲』なのだが、ダラットが主人公の男女が出会い不倫の恋におちる街として登場する。男は農林省の官吏で、戦争中に軍属としてダラットの林業事務所に勤務中の技師。女はキニーネの栽培試験をする研究所のタイピスト、という当時のキャリアウーマンという設定である。第二次世界大戦中のヴェトナム(仏印=フランス領インドシナ)は、他の南方地帯が激戦地だったのに比べて、戦場から離れた、いわば無風地帯であった。特にダラットはその環境からまるで楽園のような場所に描かれている。例えばこうである。

「昭和18年の秋、ダラットに着いたのである。...高原地帯のせいか非常に住みいいところであった。仏蘭西人で茶園を経営しているものが多く、澄んだ高原の空に、甘い仏蘭西の言葉を聞くのはゆき子には珍しかった」

「森の都サイゴンの比ではないものを、この高原の雄大さのなかに感じた。高原のダラットの街は、ゆき子の眼には空に写る蜃気楼のようにも見えた。」

「ランビアン山を背景にして、湖を前にしたダラットの段丘の街は、ゆき子の不安や空想を根こそぎくつがえしてくれた。」

「内地は段々住み辛くなっているそうですが、ここにいれば極楽みたいでせう？」

ダラットは、今も昔も小説に描かれたように爽やかな高原の街であることがわかるのだ。

『浮雲』への疑い

小説を読んでいて気がついたのは、ベトナムの樹木や果物についての説明がとても詳しく描写されていたことだった。主人公の男性が林業技師で、尚且つその描写は、彼が農業新聞に記事を投稿するという場面だから当然といえば当然なのだが。それにしても女流小説家がここまで詳細に書けるものなのか？例えば、松の木の種類などキチンと書き込ん

であり専門家ならではの書き方には、説得力がある。又、地名もダラットだけでなく、ハイフォン、ハノイ、ユエ、サイゴンとヴェトナム各地を列車で旅する場面もある。

だが、逆にあまりにも詳しいすぎるのでは？と違和感を感じたのだ。よくミステリー小説では状況を知りすぎている人物はかえって怪しい、という例がよくある。実は現場に立って居ないのではないかと疑ってみたくなった。林芙美子はヴェトナムに旅した体験があるのかどうか？あるとしたら何時、何処へ行ったのか？何の目的があったのか？戦争中に小説を書くために旅行するなんてことが許されたのか？知りたくなった。

私が旅行の前に読んだガイドブックには、「小説家がいつこの地を訪れたのか不明であるが、戦中もしくは戦後間もない時期であったことは想像できる。」とあった。

戦中はともかく戦後間もない頃というのはまずあり得ないはずだ。占領下の日本からヴェトナムへ旅ができたはずがない。うっかりと読み過ごしていたが誤りだと思う。

幻のダラット

林芙美子の年譜を調べてみた。1942(昭和17)年 三十九歳 10月、軍の報道班員として南方へ派遣され、マレーシア、仏印、スマトラ、ジャワ、ボルネオなどに八ヶ月滞在。スラバヤでは、現地の村長宅で暮らし「浮雲」の背景となった。戦争激化のため文筆活動は制約された、というのが一般的であった。『浮雲』初版の「あとがき」に「戦争中、南方の島を八ヶ月ほどまわり、此の地方を知っていたので、仏印を背景に選んだ」とあるのが根拠らしい。小説の設定からみて、行ったとしたらこの時であろう。だが、ダラットとは書いてない。仏印に行ったのではなく、知っていたとある。実に微妙な文章である。

この時の事情をもっと詳しく調べたものを更に探してみた。しかし、仏印を直接訪れたという記録は残されていない。資料によれば、林芙美子達女性作家5名と新聞社、出版社から12名が陸軍報道部の臨時の徴用に応じ、「南方視察」に赴いたのは1942(昭和17)年10月だった。南方は後進地域ではなく快適な面もある文化性を強調したイメージ戦略の一環であった。この時の行程など詳細な記録は軍事上の制約もあり確かめられないようだが、広島に10月26日に集結、11月16日シンガポールに到着したという。病院船でらしいが、経由地はどこかも明らかではない。帰国は翌年の5月とされている。林芙美子は、当時新聞・雑誌でマレー半島やインドネシアのジャワ・スマトラ・ボルネオ島については南方体験の紀行文を書いている。しかし、ヴェトナムに関する紀行文は確認されていない。

ヴェトナムに行った可能性があるのは、往路のシンガポール到着前の2週間か、復路の帰国した年の5月中旬から下旬であろうと、推定されている。しかし本人の微妙な証言をただ信じているだけである。これだけでは納得できない。作家は巧みに嘘をつき、もう一つの真実を創り出すのが商売である。

『浮雲』は仏印の奥地森林地帯の調査に従事した農林技師・明永久次郎(1889～1983)が書いた『佛印林業紀行』を、かなり参考にしている、という資料があった。国会図書館で

本を探し、指摘されている箇所を実際に読んでみた。事実、小説『浮雲』の文章とほぼ同じ部分が数カ所あった。特にダラットを中心としたランビアン高原の樹木、漆、伽羅の木、果実についての説明等非常によく似ている。また、登場人物の設定も農林技師であり、山林局長の名前も同一だった。これで、腑に落ちた。ほぼ間違いなく林芙美子は、この本を読み、種本としたに違いない。それにしても、この本は非常に専門書に近い本である。何時、どのようにしてこれを手に入れ読むことができたのだろうか？

研究者によれば、同じ落合に住んだ友人で、1928(昭和28)年に結婚していた詩人の松下文子の夫・林学博士松下真孝から明永氏を紹介されていたと云う。東大で林学を専攻し、林業試験所に勤めていた氏は、戦時下の1941(昭和16)年末、林業調査団の一員として仏印(現在のヴェトナム各地、ラオス、カンボジア)に渡り、全地域の密林・山林を踏査した。『日本農林新聞』に一部を連載した後、1943(昭和18)年10月『佛印林業紀行』を出版。この時かあるいは戦後なのかははっきりしないが、林芙美子はこの本を読んでいたのだ。ダラットには行っていないが、ダラットの情報は手に入れていた。だから書けたのだ。林芙美子のダラットは幻であった。行っていない、というのが私の推察である。

明永氏と出会った時期については、1934(昭和9)年初夏、旭川の松下邸を訪ねた時との説がある。しかし、つい最近の日経新聞の記事によれば、1931(昭和6)年8月に『大陸日報』(カナダのバンクーバーで発行の日本語新聞)に小説『浮雲』の原型を思わせる短編小説を寄稿していたことが、分かったとのことである。短編は「外交官と女」といい、林業分野の仕事に携わる男性外交官が、中国アモイ赴任時代に知り合った熊本・天草出身の女性を回想する独白体だとか。確かに設定が『浮雲』を思わせるものがあるようだ。

であれば、松下夫妻から紹介で、この時以前に既に明永氏を知っていた可能性がある。

『浮雲』を書いたのは

『浮雲』が雑誌『風雪』に連載され始めたのは、1949(昭和24)年11月から。完結したのは1951(昭和26)年4月だ。戦後の代表作『浮雲』の構想は、昭和初期からの知人明永氏と出会ったことから生まれた、と考えたい。彼の著作『佛印林業紀行』をダラットが登場する場面に巧みに援用し、自らの戦前・戦中・戦後の体験を物語として肉付け創作し膨らませた。20年もの熟成を経て名作として結実したことになる。

執筆の動機として、もう一つ考えられるのはライバルの存在かも知れない。彼女は、宮本百合子をライバル視、反発していたというが、同時代の女流作家の森三千代も気になる存在だったかも知れない。いづれも裕福な生まれであり、貧困の中で放浪生活の中から成功をつかんだ芙美子とは全く違っていった。負けたくなかったはずだ。

森三千代は、女子高等師範学校中退のインテリで、林芙美子より二歳年下。夫は羨ましくも有名な詩人金子光晴だ。彼女は戦時中の1942(昭和17)年、ヴェトナムに旅行してい

る。ハノイ、ユエ、ダラット、サイゴン、更にはカンボジアまで、外務省から文化使節団の一員として仏印に派遣されたのだ。軍の宣撫策ではなく親善の為だった。林芙美子は、南方徴用として病院船による船旅だったのに対し、羽田から二昼夜の空旅でハノイに入っている。マレーシア、インドネシアには行ったが、ヴェトナムには行けなかった林芙美子と違って、フランス文化の香りのするダラットや憧れの小パリ・サイゴンに旅したのだ。森三千代はこの年、ヴェトナム体験をもとに『詩集インドシナ(仏語)』『晴れ渡る佛印』『金色の伝説』といった作品を世に出している。林芙美子は、これ等を目にしたがこの時ヴェトナムを描こうにも描けなかった、体験できなかったからである。戦後『浮雲』を構想したのは、行きたかった、書きたかったという無念や嫉妬があったのではなからうか？

屋久島への旅も執筆の大きなきっかけとなった。1950(昭和25)年、雑誌社の企画で『屋久島紀行』の取材に出かけた。当時、屋久島は、台湾も沖縄も失った日本の南の果ての地であった。南国情緒豊かな島の風物・人情は、ジャワやスマトラといった南方を偲^{しの}ばせ、唯一とっていいほど彼女の華々しい時代であった南方体験を思い出させる地だった。そして行きたくても行けなかったヴェトナムを思わせる地でもあった。

また、小説の中で随所にみて取れるが、彼女には南方徴用だけでなく戦意高揚に協力したという贖罪意識があった。戦中・戦後の自身の過去との訣別を告げる地が欲しかったのだ。物語の終焉の地として屋久島が相応^{ふさわ}しく思えた。林芙美子は、幻のダラットをその華やかな時代の象徴とし、現の屋久島を終焉の地とする小説『浮雲』を完結させたのだ。

映画『浮雲』

『浮雲』は成瀬巳喜男監督、高峰秀子、森雅之主演で1955(昭和30)年映画化された。まさに日本映画の黄金時代が始まろうとしていた頃だ。史上最高の恋愛映画として評価され、作品としても俳優としても数々の賞を受賞している。DVDで初めて見てみた。

ほぼ原作に忠実に物語がモノクロ画面で映像化されていた。戦後の荒廃した日本の様子を伺い知ることができる貴重な資料とも言える。解説資料によれば、二人が出会うダラットのあるランビアン高原は、伊豆山中でのロケだとか。室内風景はスタジオ撮影だ。原作でもそうだが、戦時中の楽園のようなダラットを引き揚げた二人は、敗戦後の荒廃した日本で、ダラダラと頹廢的な不倫関係に引きずられてゆく。楽園と荒廢の地の対比が印象的だ。そして二人の再出発の地、最後の地として屋久島が描かれている。主人公達の永遠の別れのシーンが素晴らしい。映画での屋久島行きは鹿児島港はロケしたらしいが、宮之浦港へは舩^{はしけ}で上陸した時代であったのが、時代を感じさせる。島の場面は伊豆のロケとスタジオ撮影だとか。もしこの映画をリメイクするならば、ダラットと屋久島にロケして欲しい。きっと傑作がまた生まれる予感がする。主役の女優は、高峰秀子も良かったが、明るく健康的すぎる。少し色っぽくて頹廢的で影のある美人がよいのだが...

メコンデルタの憂鬱

爽やかなグラットを後に、凡そ50分程のフライトでヴェトナム最大の都市、ホーチミン・シティに着いた。サイゴンと言った方が今でも馴染むのでサイゴンと以下呼びたい。如何にも南国の湿った暑熱に満ちていた。飛行場はヴェトナム戦争当時、アメリカの最後の修羅場となったあのタンソンニヤット国際空港だ。ニュース映像で見たあの場所だった。サイゴン市内に入る前に出かけたのは、ちよっと南のメコンデルタの街ミトーだった。ボートや小舟に乗り、巨大な河の中洲の島をクルージング。島内で乗り合わせた馬車馬が暴走したのが想定外のサプライズだった。夜はサイゴン川に浮かぶレストラン船に乗りディナーとなる。ネオンや高層ビルが幻想的だ。あれからもう約40年だからか、ここでヴェトナム戦争があったことが嘘のように思えるくらいだった。

戦争は1965年の米軍上陸から1975年のサイゴン陥落まで凡そ10年間のことだった。NE ネットなどなかったあの時代、テレビのニュース映像、新聞・雑誌等の報道でヴェトナムを体験した。だが、何といても強烈な印象として残っているのは、私にはヴェトナム戦争映画だった。1980年代、続々とハリウッド製の戦争映画が封切られた。主なところでは

『ディア・ハンター』(1978年)『地獄の黙示録』(1984年)『プラトーン』(1986年)『フルメタル・ジャケット』(1987年)『グッドモーニング・ベトナム』(1987年)『7月4日に生まれて』(1989年)等々。ほとんどリアルタイムで劇場公開作品を見ている。中でも、最も強く印象に残っていたのがマイケル・チミノ監督の『ディア・ハンター』だった。主演は、あの『ゴッドファーザー2』でブレイクしたロバート・デニーロとアカデミー賞の常連となったメリル・ストリープだ。クリストファー・ウォーケンのロシアン・ルーレットの狂気のシーンが忘れられない。戦場の狂気が若者を蝕ばみ、いかに加害者であるアメリカをも傷つけたかをえぐり出していた。ロッキー山脈での鹿狩りの張り詰めた静寂と、戦地ヴェトナムでの緊迫感との対比が素晴らしい効果をあげていた。久方ぶりにDVDで見てみたが、全く色褪せない名作だ。とは言え、どこまでいっても欧米人からみたヴェトナム戦争であることには変わりはなく、被害者であるヴェトナム人からの視点ではない。

戦争当時、戦場の体験からヴェトナムを書いた作家がいた、**開高健**^{たけし}だ。彼は、1964(昭和39)年の11月から翌年の2月まで、朝日新聞の臨時海外特派員として米軍の従軍記者を勤めている。200人の所属部隊はメコンデルタでベトコンから襲撃され、生き残ったのはわずか17人でしかなかった。そのうちの一人であった彼は『ベトナム戦記』をルポとして書き、小説『輝ける闇』にその体験を昇華させた。サントリーのCMの開高健を知ってはいたが、これ等を読んだことがなかった。そこで遅まきながら読んでみた。実に読み応えがあった。灼熱のメコンデルタの泥、心まで蝕まれるような暑さ、汗で粘つくようなサイゴンの街、怠惰な暮らしの中での焦燥、壮絶な生と死の狭間。戦場の中に身を置いたものならではの感覚を、クセのある、無骨で粘っこい文体で表現していた。単に戦争の悲惨さを伝える以上のリアルな凄さがあった。傑作だと思う。

意外なことに、あの司馬遼太郎もこの当時渡航している。1973(昭和48)年、米軍が撤退した後、サイゴンが陥落する前の南ベトナム時代である。サイゴンの街にしばらく滞在し、翌年『人間の集団について ベトナムから考える』という随筆を出している。「街道をゆく」の番外編のようなタッチで、あくまでも部外者の立場でこの国と人について評論しているこの作家はこんなものだろう。この人には文学を求めてはいけない。

市内の中心部にある**戦争証跡博物館**を見学した。屋内外に戦争の足跡をたどる遺物が展示されていた。戦車、ヘリ、大砲、爆弾、証拠写真等だ。枯れ葉剤の犠牲となった人々の写真もあった。そんな中に、戦争中に命を落とした戦場カメラマン、報道写真家のコーナーがあった。あのロバート・キャパの写真もあった。『安全への逃避』で有名な沢田教一、石川文洋、中村悟郎、一ノ瀬泰造といった日本人カメラマン・ジャーナリストも紹介されている。もっと戦争の悲惨さとか、米軍の残虐さを強調したような展示を予想していたのだが、全体として意外と粛々と事実を伝える姿勢が感じられた。

この博物館のことを調べてみたら、こんなことが分かった。1975年サイゴン陥落の年にオープンしているが、何度か名前を変えている。最初は「アメリカ帝国主義と傀儡政権による戦争犯罪展示館」、次は「アメリカによる戦争犯罪博物館」だったらしい。アメリカとか帝国主義とか犯罪という文字が消え、今は単に「証跡」でしかない。つまりプロパガンダ色が薄れ、平和に大切さを訴えるソフトな路線になったということだ。

中国や韓国では、反日教育の為にエゲツないほど露悪な展示がなされている(一部見学したことがある)ことと比べると、国民性の違いなのか、ニュートラルだと思った。アメリカに対する怨念とか執念深さは感じなかったのだ。

サイゴンからヴェトナムを離れるに当たって、日本語のできる男性ガイドに「嫌いな国はどこですか？」と聞いてみた。するとハノイと同じ答えが帰ってきた。「中国です」と。好きな国はどこですか？という質問には、ニュアンスは強くなかったが、意外やアメリカとか日本という答えだった。

森三千代の『**金色の伝説**』は、ヴェトナムに伝わる伝説を集めた本だ。序文に「安南にとってシナは、文化の源という役割を果たしはしたが、同時に永遠の敵であった。多くの古い伝説は、シナからの賊を討つという英雄的行動を主題としている…。安南は、幾度かシナに征服されて郡県になった。その都度英雄があらわれては、その圧迫から抜け出して独立国家をつくったが、…封冊をうけ、貢物をささげて和平を保たねばならなかった。安南人の一つの、あの憂鬱さは、そんなところに胚胎するのかもしれない。」とある。

中国との間には2000年以上に渡る複雑な感情があるのだ。フランスが植民地統治したのは80年、アメリカが戦場としたのはたかが10年位ということか。むしろ、新しく憧れの文化や文明をもたらした国と受け止めているようだ。民族の歴史とは奥が深いものだ。

日本もアメリカから原爆落とされて酷い目にあったのに、決して嫌いではない。(了)

参考資料

書籍:

- 『ヴェトナム』(旅名人ブックス編集部編/2007年版)、 『ヴェトナム 地球の歩き方』(2012年版)
『ヴェトナム 豊かさの夜明け』(坪井善明/1994年刊)
『漢文の素養』(加藤徹/2006年刊)
『漢字文化圏の歴史と未来』所収「日本の近代化における漢字の役割」(鈴木孝夫/1992年刊)
『前進か死か インドシナ編』(柘植久慶/1994年刊)
『浮雲』(林芙美子/1953年刊)
『華やかな孤独 作家林芙美子』(尾形明子/2012年刊)
『林芙美子とその時代』(高山京子/2010年刊)
『南方徴用作家(戦争と文学)』所収「女は戦争を戦うか?」(中川成美/1996年刊)
『火と燃えた女流文学』(瀬戸内晴美編/1989年刊)
『林芙美子 女のひとり旅』(橋本由紀子/2010年刊)
『林芙美子と屋久島』(清水正/2011年刊)
『林芙美子の昭和』(川本三郎/2003年刊)
『金子光晴と森三千代』(牧羊子/1996年刊)
『晴れ渡る佛印』(森三千代/1942年刊)、
『金色の伝説』(森三千代/1942年刊、1991年復刻版)、
『佛印林業紀行』(明永久次郎/1942年刊)
『人間の集団について ベトナムから考える』(司馬遼太郎/1974年刊)
『ベトナム戦記』(開高健/1990年刊)
『輝ける闇』(開高健/1965年刊)

映画:

- 『夏至』(2000年/アスミック・エンターテイメント映画/VHS版)
『グラン・トリノ』(2009年/ワーナーブラザーズ映画)
『ディア・ハンター』(1978年/ユニバーサル映画/DVD版)
『浮雲』(1955年/東宝映画/DVD版)

新聞:

日本経済新聞 2013/5/13 朝刊・社会面記事

WEB:

NET資料多数。